

「自然養鶏衛生対策飯田モデル」の取り組み

小澤 尚・長田宣夫
飯田家畜保健衛生所

要 約

2001年6月、県内北佐久郡下のいわゆる自然養鶏農場でニューカッスル病(以下「ND」という。)が発生したのを受け、管内の自然養鶏農場8戸に立ち入ったところ、8戸すべてがNDワクチンを未接種だったため、43羽のHI抗体価(GM)は、3.0倍だった。

2002年度は、ND発生情報の随時周知、毎年1回の立入検査の実施、ND以外の検査も実施、検査結果の持参、窓口的農家の養成などの項目を重点とした「自然養鶏衛生対策飯田モデル」と称する衛生対策に取り組んだ。

同年11月の検査では、5戸は既にワクチンを接種するなどしていたことから、NDのHI抗体価(GM)は15.7倍だった。以上のことから、自然養鶏農場に対する2年間の衛生対策は、その成果が認められた。

1 はじめに

従来、当所での養鶏を対象にした衛生業務は、家畜伝染病予防法に基づく種鶏の検査や鶏卵衛生対策(畜産物安全性確保対策)などが中心で、いわゆる自然養鶏との連携は、必ずしも十分ではなかった。

そこで、県内でNDが発生したことを機に、当所では2カ年間にわたり管内の自然養鶏農場に立ち入り検査などを重ね、当所独自の衛生対策、「自然養鶏衛生対策飯田モデル」に取り組んだので報告する。

2 県内でのNDの発生と当所の対応

2001年6月21日(木)、北佐久郡下のいわゆる自然養鶏農場でNDが発生した。

表1に当所の一連の初動対応を示したが、発生を知ったその日のうちに管

内の養鶏農場をリストアップし、ND発生の周知及び聞き取り調査などを実施した。当時は自然養鶏の情報に乏しく、当所の養鶏農家台帳にも記載されていない施設が何か所かあったので、養鶏農家の「口コミ」や農業改良普及センターの新規就農情報などを参考にしながら、自然養鶏を含む最新の台帳に更新していった。

発生日の午後9時までには、管内21戸の養鶏農場にNDの発生情報を周知し、翌日には、市町村や関係機関にも周知した。なお、市町村には、広報紙

表1. NDの発生と当所の対応

2001年6月21日 午後5時：発生情報受理
同日午後5時～9時：管内21農場に周知・聞き取り 養鶏農家台帳の更新(自然養鶏リストアップ)
6/22：広報発行、学校・福祉施設での飼育調査
6/25～：立入調査、16戸108羽のND抗体検査
6/29：結果回答、文書指導
7/27：飼育者、獣医師、行政向け研修会開催

などへの発生情報の掲載と学校などにおける鶏類の飼育状況調査も依頼した。

表2. いわゆる自然養鶏農場への立入調査結果

農家番号	市町村	略称	区分	飼育羽数	台帳記載	立入実績	NDワクチン歴
1	飯田市	A	採卵	700	×	×	×
2	飯田市	P	採卵	100	×	×	×
3	飯田市	N	採卵	750			×
4	阿南町	I	採卵	600		×	×
5	阿南町	M	採卵	80		×	×
6	阿南町	O	採卵	135	×	×	×
7	阿南町	W	採卵	190		×	×
8	泰阜村	T	採卵	380			×
合計				2,935			

週明けの25日から21戸すべてに立ち入り調査を実施し、うち、16戸108羽についてNDの抗体検査を実施した。

3 自然養鶏に対する立入検査概要

立ち入り調査を実施した21戸のうち、当所がいわゆる自然養鶏農場と位置づけたのは、表2に示す8農場である。

表3. いわゆる自然養鶏の特徴

- 1 平飼い採卵養鶏
- 2 受精(有精)卵志向
- 3 飼料や飼育環境等に"こだわり"
- 4 非農協、非行政、非商社系
- 5 I(アイ)ターンや脱サラ組多い
- 6 鶏卵は、宅配、直売、ネット販売 など
- 7 ワクチン、消毒薬、医薬品等は原則不使用

8戸とも飼育規模は比較的小さく、当所の養鶏台帳に記載がなかったり、立入実績のない農家も多かった。さらに、NDのワクチンは8戸すべてが接種したことがなかった。これらの農場の共通点を表3に示した。

全員が赤玉系の平飼い採卵養鶏で、いわゆる有精卵志向が強く、給与飼料も自家配合や発酵菌を利用するなどし

ていた。農場主は、8名中6名が県外からの転入者で、それぞれ独自の「こだわり」を持って養鶏業を営んでいた。飼料の購入や生産物の販売も個人やグループで行い、鶏卵はGPセンターを介さずに、無洗卵のまま宅配やネット販売していた。

衛生上の最大の特徴は、ワクチンや抗生物質、医薬品類などを否定する傾向が強いことであり、8戸すべてがNDワクチンや駆虫薬などを使用していなかった。

表4. 自然養鶏家の意見や考え方の一例

- 1 抗生物質、医薬品、消毒薬等への「拒絶感」
「長靴消毒用の消毒薬は農場内に撒かないでほしい」
「駆虫はしない。鶏卵から回虫が出るということは自然の証」
- 2 既存の「効率的、集約的畜産」への反発
「現在の畜産は虐待の産物だ」
「豚肉は薬漬けで食べられない」
- 3 行政への警戒・不信
「役人は製薬会社と癒着しているから、すぐ薬を推奨する」
「家保って我々に何をしてくれるところか？」

それぞれが強い考えやこだわりを持つ農場主が多いため、最初は聞き取り調査以前の「入り口論」で時間を費やし、なかなか議論がかみ合わなかった。立ち入り調査時の会話のなかから、農場主の「極端な」意見の一例を表4に示した。

大なり小なりこのような意見を持つ自然養鶏の農場主に対しては、NDがひとたび発生すれば、地域の養鶏業全体が大きな被害を被るので、立場を越えてみんなで防いでいこうと、ワクチンの必要性と接種を「説得」した。

4 自然養鶏農場でのND検査

6月25日から管内21戸の養鶏農場に立ち入り、16戸108羽についてND

の抗体検査を実施した。その概要を表5に、また、自然養鶏8戸の内訳を表6に示した。

表5. 立入及び検査の概要

区分	戸数	羽数	HI抗体価(GM)
自然養鶏	8	43	3.0
自然養鶏以外	8	65	79.2
合計・平均	16	108	21.6

表6. 自然養鶏農場でのND抗体検査結果

農家番号	略称	ワクチン歴	検査羽数	HI抗体価(GM)
1	A	無	5	2.3
2	P	無	5	3.0
3	N	無	5	3.0
4	I	無	6	4.0
5	M	無	6	2.2
6	O	無	6	2.5
7	W	無	5	3.4
8	T	無	5	4.0
合計平均			43	3.0

自然養鶏8農場は、いずれもワクチンを接種していなかったため抗体価は低く、8戸43羽の平均抗体価は3.0倍であった。これに対し、自然養鶏以外の農場では、8戸65羽で79.2倍の抗体を保有していた。

自然養鶏とそれ以外の農場とを比較したのが、図1である。自然養鶏以外の農場では、保有抗体の分布に大きなばらつきが見られたが、自然養鶏の

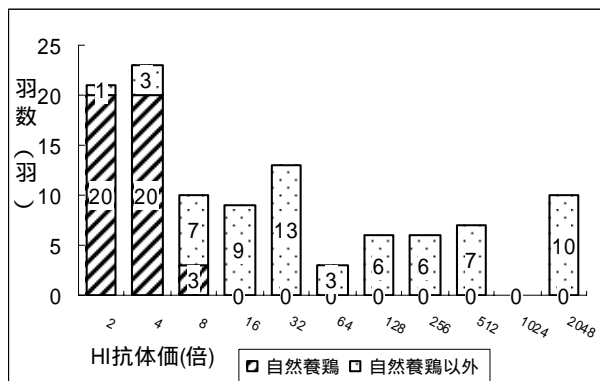


図1. 抗体保有状況の比較

場合は、抗体価が4倍以下に偏在していた。抗体検査した108羽のうち、抗体価4倍以下のものは44羽であったが、うち40羽が自然養鶏の鶏であった。

検査結果の統計学的な考察は実施していないが、平均抗体価の違いや抗体の分布などから、両者の抗体保有状況には大きな違いが認められた。

5 検査後の対応

立ち入り検査を実施した養鶏農場には、ND抗体検査結果をふまえて、それぞれコメントを添えて文書で回答した。

図2に実際に施行した文書の写しを示したが、抗体検査結果をグラフで示し、文書のなかでワクチン接種を勧める内容とした。また、追って養鶏経営者向けの衛生研修会も開催し、ワクチン接種を重ねて訴えた。

これらの助言や指導などにより、9月までに自然養鶏の8戸すべてが初めてNDのワクチンを接種した(B1株生ワクチン、飲水)。

以上が2001年度の対応である。

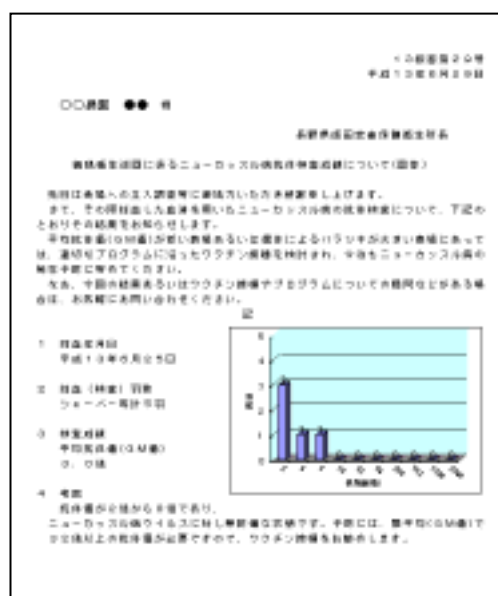


図2. 立入(検査)結果回答文書

6 2002年度「飯田モデル」の取組み

2002年度は、自然養鶏とのつながりを継続するため、「自然養鶏衛生対策飯田モデル」と称する、前年度よりは一歩踏み込んだ対策を講じた。

特に目新しい取組みではないが、表8に重点項目とした5点を示した。

表8. 「飯田モデル」重点5項目

ND発生状況は広報を直送し周知した。
 年1回は立ち入り検査を実施した。
 ND以外の検査も実施した。
 検査結果はレポートを持参した。
 当所との窓口農家を養成した。

については、市町村経由や封書での周知は養鶏経営者への訴求力に乏しく、家畜保健衛生所の認知度向上も期待できないため、はがきで直接郵送した。 、 、 については、後述する。

については、兼業養鶏農家でもある町役場職員に依頼し、町内農家のとりまとめや日程の調整、巡回などに協力を願った。「地元の仲間」を介すことにより、業務の遂行を円滑に進めることができた。

7 立入検査の概要

2002年度における自然養鶏農場への立入検査概要を表9に示した。

表9. 2002年度立入検査の概要

立入年月日	2002年11月13日, 20日
対象	'01年6月に立ち入った自然養鶏8戸
検査項目	ND、ひな白痢、MG・MS、SE等、内部寄生虫、鶏卵のATP
検査後の対応	農場ごと「結果レポート」を作成し、後日持参の上説明
検査後巡回	同年12月13日, 18日

表8ののとおり、特に先方の要望がなくても年1回は立ち入りに赴こう

と、前年6月に訪れた8戸に11月に再度立ち入り、検査を実施した。前年6月は、県内でのND発生を受けた緊急的な立ち入りだったためNDの検査しか実施しなかったが、2002年度は、表8の及び表9のとおり、ND以外の検査も実施した。

検査の概要を、表10に示した。

2001年度は全8戸の検査が実施できたが、2002年度は1戸が検査を拒んだため、立ち入りや情報交換はできたが採材はできず、検査実施農家は7戸となった。

表10. 検査結果

項目	検体	戸数	検体数	方法	結果
ND	血清	7	36	HI	15.7倍(GM)
ひな白痢	血清	7	36	急速平板凝集	すべて陰性
MG	血清	7	36	急速平板凝集	3戸10羽陽性
MS	血清	7	36	急速平板凝集	5戸20羽陽性
SE等	便及び鶏卵	7	35	培養法	すべて陰性
寄生虫	糞便	7	18	浮遊法	5戸9検体から回虫等を確認
"清浄度"	鶏卵	7	14	ATP	MAX=7,384RLU

まず、ND以外の検査結果では、対象が自然養鶏ということで、回虫卵など寄生虫卵が比較的多く認められた。

鶏回虫は鶏卵中への虫体の混入がしばしば問題になるが、自然養鶏家は意図的に駆虫をしないことが多い(表4)。また、一般的に駆虫薬は産卵鶏に使用できないことから、食品衛生上の「不良食品」論議とも関連し、指導上の懸案事項のひとつである。

糞便などのサルモネラ検査も常法により実施したが、すべて陰性であった。

8 NDの検査結果

2002年度は7戸36羽についてNDの抗体検査を実施した。前年との比較を表11及び図3に示した。

表11. 自然養鶏農場でのND抗体価の比較

農家番号	略称	2001年		2002年	
		検査羽数	HI抗体価	検査羽数	HI抗体価
1	A	5	2.3	5	64.0
2	P	5	3.0	5	8.0
3	N	5	3.0	5	16.0
4	I	6	4.0	0	NT
5	M	6	2.2	6	5.7
6	O	6	2.5	5	16.0
7	W	5	3.4	5	24.3
8	T	5	4.0	5	16.0
合計または平均		43	3.0	36	15.7

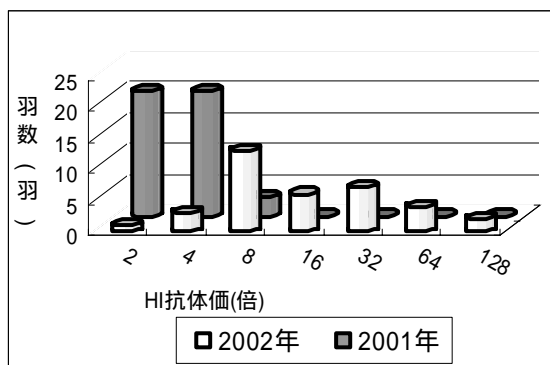


図3. 自然養鶏農場での抗体価分布の比較

2001年は8戸43羽でのGMが3.0倍であったのに対し、2002年は7戸36羽で15.7倍と、若干ながら上昇していた。また、2002年の抗体値は、極端な偏りはない分布を示していた。(図3) 図4は、ある自然養鶏農場(表11の農家番号1)での抗体価上昇例である。2001年6月にはほとんど抗体を保有していなかった(2.3倍)が、その後ワクチンを2回(2001年7月と2002年7月)接種(飲水)したことにより、2002年11月には、平均で64倍の抗体を保有していた。

これらのことから、ワクチン接種を励行すれば、抗体価は確実に上昇することが証明できた。

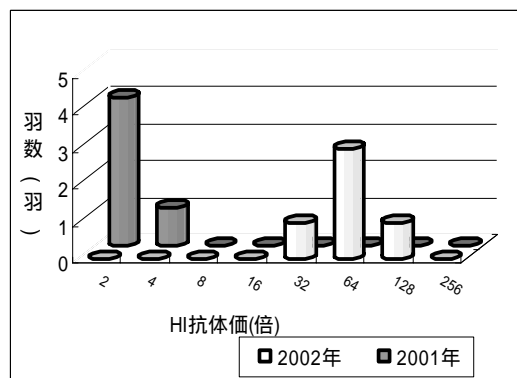


図4. ワクチン接種による抗体価上昇例

9 検査結果後の対応

表8の のとおり、検査後は各農家ごとにレポートを作成し、後日持参の上、衛生対策などを協議した。レポートは図5のとおり、あえて図表にこだわり、まず見てもらうことを優先した。



図5. 結果回答用レポート

図6のとおり農家では、レポートのグラフなどを示しながら、それぞれの鶏舎脇で検査結果に基づく今後の衛生対策などを話し合った。

これらの取り組みの結果、もともとワクチン接種に慎重であった自然養鶏農家ではあるが、結果回答訪問時には、既に5戸がワクチンを接種済みあるい

は接種の計画(獣医師あて依頼)をしていたなど、ワクチン接種継続に動き出していた。



図 6 . レポート持参による結果回答

10 まとめ

2001年6月、自然養鶏農場8戸に立ち入り、NDの抗体検査を実施したところ、すべての農場でワクチンを接種したことがなかったため、抗体はほとんど保有していなかった。

その後の指導や助言等により、同年9月までには、全8戸が初めてワクチンを接種した。

2002年度は、「自然養鶏衛生対策飯田モデル」と称し、5項目を重点に衛生対策をすすめた。検査の結果、NDの抗体価は若干ではあるが上昇していた。

以上のように、我々の取り組みは、自然養鶏の衛生対策推進上、一定の成果を上げたものと認められた。

今後も「飯田モデル」を推進し、自然養鶏経営者らにNDワクチン接種継続を訴え、より良好な抗体を付与していきたいと考えている。また、これら特色ある地域の畜産を、関係機関と協力しながら支援していきたいと考えている。